

2016年9月3日

国際審判員 譜久山明子

(沖縄県ボート協会所属)

## Asian Rowing Cup II 2016 報告書

2016年7月28日～31日にシンガポールのPANDAN RESERVOIRボートコース(貯水池)で開催されたアジアボート連盟(ARF)主催のアジアカップIIに参加しましたので、以下の通り報告致します。

### 1 大会概要

本大会はアジアカップIIの他にAsian School Event(Max 19 years old in 2016)も併催されていた。

#### The Asia Rowing Cup II

Men (Open) : M1X, M2X, M2-, M4-, M8+

Women (Open) : W1X, W2X, W2-, W4-

Men (Lightweight) : LM1X, LM2X

Women (Lightweight) : LW1X, LW2X

#### School event (1000m)

Boys : 1X, 2X, 4-

Girls : 1X, 2X, 4-

#### (1) 大会日程

7月25～26日 Team Training

7月26日夕方 Managers Meeting

7月27日 School event 予選16レース

7月28日 アジアカップ 予選11レース、School event 敗復10レース

7月29日 アジアカップ 敗復5レース、アジアカップ予選9レース、School event 準決勝8レース

7月30日 アジアカップ 敗復3レース、School event 決勝10レース

7月31日 アジアカップ決勝13レース

#### (2) 参加国

アジアカップ : インドネシア、韓国、中国、マレーシア、パキスタン、台湾、香港、ベトナム、タイ、  
シンガポール、フィリピン

スクールイベント : スリランカ、インド、パキスタン、マレーシア、フィリピン、インドネシア

### 2 審判体制

本大会の国際審判員(ITO)は、中国のBing LIANG 審判長を含め14名(うち女性4名)であった。中国1名、日本2名(岩尾、譜久山)、韓国2名、ミャンマー2名、香港2名、マレーシア4名、シンガポール1名である。

審判長、発艇、発艇アシスタント、線審、主審4艇、判定長、判定員、監視長、出艇桟橋、帰艇桟橋、選手計量、以上の部署に国際審判員が1名ずつ配置された。今回、主なNTOIは主審艇のドライバーのみであった。

### 3 審判業務

大会初日の前日7月26日は終日FISAの審判セミナーが行われた。講師はFISA Umpiring Commissionのニックハンター氏（オーストラリア）と千田隆夫氏であった。全員が揃ったのミーティングは大会初日の朝行われた。私が経験した、日々の審判部署及びその日のトピックスを中心に報告していく。



#### ・7月27日 Umpire(主審) スクールイベント予選1000mレース

初日は主審を担当することになった。ドライバーはタイから大会の為に雇われたアルバイトの男性だった。大会の準備のため1カ月前からシンガポールに入りコースの準備をしているとのことだった。彼を含めて5名タイから来ており、地元シンガポールの方々と共に主審艇の運送や救助艇など水上関係の仕事を担当していた。

スクールイベントのレースは1000メートル地点からのスタートで、ポートホルダーなく初心者の多いイベントだったため、各レース、スタートするまでに時間がかかりレースは全体的に遅れがちであった。

朝のミーティングで、審判長からスクールイベントは主審2艇でレースにつくようにという指示であった。時間が遅れていた以外、レース自体は大きなトラブルもなくスムーズ進んでいった。



#### ・7月28日 Control Commission(Out) 監視(出艇桟橋)

この日は1日中出艇桟橋での監視業務であった。監視部署にNTOは配置されていなかったため、慌ただしく業務を行っていた。桟橋では監視部署を統括する監視長のヒシャム（マレーシア）氏と、帰艇桟橋担当のチャン（香港）氏と私の3人であった。出艇時には、本人確認とヒールロープ、ユニフォーム、ブレード、バウナンバー等を中心にチェックしていた。今回はポートのステッカー（国名、大会ステッカー）については確認していなかった。ヒールロープを付けていないクルーがいくつかあったが、地元の方が用意してくれたひも（縋りひものようなもの）があったため、すぐに対応することができた。午前中のアジアカップ予選のレースはスムーズに出艇していったが、午後のスクールレガッタ敗者復活の頃からトラブルが多かった。スクールレガッタにはスリランカのクルーが多く参加しており、参加クルーの半数はスリランカからのチームであった。シンガポールからの借艇を多くのクルーでシェアして使用していたため、2レース前のクルーが帰ってくるのを待って、桟橋で乗りかえてすぐに出艇するというパターンが多く、必然的にレースがどんどん遅れていった。ポートのシェアだけでなく、ダブルエントリーのクルーが多い事も問題だった。シングルのレースが終わって桟橋に戻ってくるのを待って、ダブルスカルに乗り換えてすぐに桟橋を出ていくクルーもあった。最終的には定刻の約2時間の遅れだった。インドのクルーの監督から、「私たちのクルーはレーススケジュールの通りの時間を見据えて出艇していた。それなのに、スリランカクルーの問題でレースがどんどん遅れ、我々のクルーはスタートまでにこの暑さの中2時間も水の上で待たされた。こんなフェアとは言えない」というクレームだった。夕方のチームマネージャーミーティングでもこの意見があがっており、明日からは1分たりとも待たずに発艇するという指示だった。監視業務で印象的だったのは、監視長がこまめに発艇へ出艇状況を報告していたことだった。日本では審判長へ報告することが常で、発艇定刻になっても発艇エリアに来なかった時等に発艇の監視と問い合わせることは時々あるが、ここでは常に監視長が発艇へ報告していた。審判同士（特にマレーシアの方々）の無線の会話で「Copy」「Copy that」がよく使われていた。あなたの言ったことをコピーした「了解」の意味で使われていて、他にも「received」「confirmed」なども同じ意味だが、より短い表現なので便利だと感じた。「Do you copy?」わかった?という表現もあるようだ。

## ・7月29日 Finish Judge/Resp at the Finish (判定、判定長)

この日は前半は判定員、後半は判定長という配置であった。記録システムはIMAS (アイマス) というドイツの業者が行っていた。始業時の段階から発艇のシステムに不具合があり、スタートボックスは作動し判定のコンピュータにも反映させているけれども各ポンツーンのライトが光らないというトラブルだった。光発艇のシステムに不具合が起きた時に、誰が対応するかが明確でなかったため、迅速な復旧ができなかった。日本での大会でもそうだが、何かシステムに不具合が起きた時の対応者を明確にしておくことはスムーズなレース運営という面では大切なことだと感じた。審判長より旗での発艇に切り替えるとの指示だった。審判共通無線で発艇からの号令を聞き判定部署のIMASスタッフがパソコン上で計時をスタートするという仕組みだった。ちなみにライトのトラブルはその日だけで、翌日以降はスムーズに作動していた。

午前マレーシアのナーザリー氏が判定長を務め、彼が着順をメモしIMASスタッフと確認し記録用紙をチェックする、私は判定ボックスの外でブザーと予備の計時を担当するという打合せであった。驚いたことに、フィニッシュラインのスリットは無く、見通し板のみが設置されていた。IMASのカメラはしっかりフィニッシュライン上に固定されているとのことだったが、ブザー係は見通し板のライン上に座り、おおよその位置で押さざるをえなかった。

午前のあるレースで、判定長が着順の確認に不安があるとのことでカメラでの確認をIMASスタッフに要求した。すぐにパソコン上で出してくれたが、バウナンバープレートの数字が不鮮明でクルーを特定することができなかった。判定長は画面上の遠近感で着順を確認し公表した。その後、審判長から「このレースの結果をもう一度確認してくれ。当該レースのクルーから着順がつかしいという訴えがある。ダブルチェックしてくれ。」という無線が入り、再度画面で確認した。判定長はやり間違いはないと判断し審判長にそれを伝えた。すると、クルーはプロテストの手続きを行い、Board of the Juryのメンバー3人が招集された。結果、判定長は画面上の遠近感で判断していたが、プリントアウトすると明確に着順の間違ひがわかった。

午後、私が判定長として業務を交代したあるレースで、着順は問題ないがフィニッシュタイムに違和感があった。IMASスタッフと判定員のナーザリー氏に相談したが、問題ないとのことでサインしてしまった。レース終了後審判長に呼ばれ、「このレースのタイムは胡らかにおかしい。このような場合はためらわずDNA (計測不能) にすべきだ。」と指導された。違和感があった時点で、タイムがつかしいからDNAにするとすることをIMASスタッフに伝えるべきだったと反省した。

## ・7月30日 Umpire(主審)

この日は前半にアジアカップ、後半にスクールレガッタ決勝という日程であった。主審艇のドライバーはシンガポールの方で、彼もまた国際審判の資格を持っていた。私が主審を務めていたスクールレガッタの女子シングルスカル決勝のレースで、700m付近で遅れていた1レーンのクルーが沈をしてしまい、幸いすぐそばにいた救助艇、待機の主審艇が対応してくれた。私はレースを進行しつつ沈したクルーの様子を見ていたところ、彼女は艇に乗り再び漕ぎ始めフィニッシュライン目指して漕いできた。他のクルーがゴールし、私は対応してくれた主審に対して無線で「彼女は自力で乗艇しレースを続けているのか？」と問い合わせた。その返事を待っていると、ドライバーが「全クルーゴールしたよ、早く白旗をあげて」と言い彼が白旗をあげてしまった。私は1レーンのクルーがレースを続けているのか棄権なのかを確認しているところだったと伝えたら遅かった。結果的に1レーンのクルーは手を借りて乗艇したことが分かり、彼女を待たずに白旗をあげて正解だったが、ドライバーが白旗をあげてしまったことに驚いてしまった。直後に審判長から無線で「白旗はあなたがあげるべきだよ」と指導された。自力乗艇なのかどうかの確認をもっと早く行うべきだった。

初日から感じていたことだったが、フィニッシュラインを通過後、全クルーが通過し主審が白旗をあげるのを待たずに、早々と桟橋に戻っていくクルーがほとんどだった。私の勉強不足なのか、国際大会ではゴール後白旗を待たずに帰ることになっているのだろうか。

#### ・7月31日 Judge at the Start (線審)

最終日はアジアカップのみのレースであった。線審部署はAligner (NTO) も無く、ひとりきりで業務を行った。ポートホルダーも業務に慣れており、彼らを統括する役割の女性もすごく協力的であった。ポートホルダーへハンドマイクで指示をしていた。スリットを見ながら左手で白旗をあげると少々ハードだったが大きなトラブルもなく業務を終えることができた。ちなみに、スクールレガッタ (1000mレース) の線審は1000mの距離表示ブイに立ち、スリットもポートホルダーも無く目視で行っていた。



#### 4 終わりに

国際審判となって初めての大会であった。国際審判としての経験を積むことができ、また、何より海外に友人ができたことも私にとって貴重なものとなった。いくつかのミスも経験してしまったが、やはり語学力の勉強不足も痛感した。トラブルが起きた際的確に伝える力つけていきたい。

最後に、本大会に審判として派遣して下さった日本ボート協会上野審判委員長、千田国際委員長、相浦事務局長、事務局の藤田さんをはじめ関係者の皆様ご感謝し、報告書とさせていただきます。

